現職日本語教師を対象とした日本語研修プログラムの実践報告
－2005 年度筑波大学留学生センターにおける京畿道外国語教育研修院日本研修の実施について－

許　明子

要　旨

本センターは、韓国の中等日本語教育の現職日本語教師を対象に韓国国内と日本国内において研修を実施している。その一環として、2005 年 9 月に京畿道外国語教育研修院で研修を受けた 43 名の研修生の中から成績優秀者 12 名を本センターに受け入れて研修を実施した。本研修では技能別日本語教育方法論の授業、オフィスアワー、特別講義などを通して専門的な知識を学び、留学生センター授業見学、学校派遣実習、ホームステイ、プロジェクトワークを通して実践的な活動を行った。

本稿では本センターで行った１ヶ月間の研修内容、活動、成果について報告を行う。

【キーワード】技能別日本語教育方法論　学校派遣実習　ゲストセッション

Report about the In-service Program for Korean Teachers of Japanese Training Program of the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education : training at the International Student Center of the Tsukuba University, 2005

HEO Myeongja

【Abstract】The International Student Center of Tsukuba University is currently carrying out a training program for Japanese language teachers in Korean middle schools and high schools. The program is designed to be held both in Korea and Japan. As a part of this project the center is planning to hold a training seminar for 12 participants with the best records selected out of the original 43 teachers who participated in the September 2006 Training Program held at the Gyeonggi-do Institute for Foreign Languages Education, Korea.

The training program aims to enhance the development of special skills in Japanese language education and includes special lectures on Japanese language education methodology, as well as a range of such activities as practical teaching lessons at schools, home-stays and project work.

This report presents the contents, activities and results of the one-month training program.

【Keywords】Japanese language education methodology, school dispatch, guest session

１．はじめに

本センターは 2005 年度に京畿道外国語教育研修院との学術交流協定を締結し、その活動の一環として、韓国京畿道内の現職日本語教師を対象に年に２回研修を実施している。韓国の現職日本語教師のみを対象に、韓国および日本で研修を行うというプロジェクトはおそらく日本国内では本学のみであろう。日本語教育の多様化やそのニーズにこたえるための日本語教育のあり方が模索されている中、本センターにおいて実施された韓国現職日本語教師の研修は日本語教育の新たな試みとして大変意義のあるプログラムであると言える。

2005 年９月には韓国国内における１ヶ月間の研修を行ったが、その研修生の中から成績優秀者 12 名を選抜し、2006 年１月９日から２月 10 日までの１ヶ月間、筑波大学留学生センターにて研修を行った。本稿では、2006 年１月に実施した日本研修について報告を行う。

日本研修の重要な目的は、研修生が韓国の学校現場で日本語を教える際に授業に取り入れられる日本事情を学ぶこと、中学校もしくは高校の学校現場を体験し、日本人学生に韓国の文化を紹介すること、研修生自身の日本語力を向上させることにある。

そこで、本センターで行った日本研修は上記の研修目的を達成すべく、以下の５つの活動を盛り込んだ授業を行った。

1）技能別日本語教育方法論および特別講義
2）プロジェクトワーク（ゲストセッション）
3）学校派遣実習およびホームステイ
4）留学生センター授業見学
5）オフィスアワー

以下、上記の研修内容について報告を行う。

２．技能別日本語教育方法論および特別講義

２．１　目的

韓国京機道外国語教育研修院で行われた研修では日本語力の向上を目的に、聴解、読解、文法と誤用分析、会話、作文の授業を行ったが、本センターにおける日本研修ではこれらの日本語の４技能のさらなる向上を図るとともに、今後の日本語の授業を改善することを目的とした授業を開設した。韓国内研修では扱えなかった語彙論やコミュニケーション論、時事日本語などの授業を開講し、日本語の４技能を生かした授業の進め方にも重点をおいた。

また、日本語や日本文化に関連のある幅広い分野について知識を得、日本語教育現場に役立ててもらうことを目的に特別講義を設けた。特別講義では、日本語の音声論、歴史的観点における両言語の関係、日本の伝統スポーツ、国際関係における日本と韓国の関係、日本語学校で使用されている文法教育の方法など、言語学的な観点や文化的な観点、日本語教育の実践的な観点におけるさまざまな内容の特別講義が行われた。

2．2　概要

技能別日本語授業は本センターの専任講師が担当したが、研修期間を通して各科目３コマずつ計 18 コマの授業を行った。開講した授業科目と内容は以下の通りである。

1）文法論 1：担当―小林典子

韓国語母語話者が注意しなければならない文法を取り上げ、その文法についての知識を整理するとともに、教え方について考察する。

2）文法論 2：担当―許明子

文法、文型を含む教材分析および教具、ロールプレイを取り入れた効果的な文法教育の方法について学ぶ。

3）コミュニケーション論 1：担当―小野正樹

教室内でのタスク活動を通して韓国人日本語学習者向けの会話教材の開発について考える。

4）コミュニケーション論 2：担当―西村よしみ

会話、談話、共話について考察し、コミュニケーション能力の育成の方法について考える。情報を取るための表現を学び、実際にインタビューを通して情報を収集する。

5）語彙論：担当―加納千恵子

和語、漢語、外来語の用法やニュアンスを理解し、和語動詞・和語形容詞、漢語動詞・漢語形容詞の用法を学ぶ。

6）時事日本語：担当―木戸光子

日本語の授業に活用できる情報を日本語で収集し、その情報を授業に取り入れる方法を学ぶ。日本のニュース、新聞やテレビ、ラジオを通して現代日本事情を知る。

また、外部講師による技能別日本語授業および特別講義を行ったが、授業担当者と科目名は以下の通りである。

1）林史典（筑波大学副学長）―「漢字文化圏の中の韓国語と日本語」

2）志々田文明（早稲田大学人間科学部教授）―「国際化と日本の伝統スポーツ」

3）河野俊之（横浜国立大学教育人間科学部助教授）―音声教育論

4）李鍾元（立教大学国際センター長）―「国際関係の中の日本と韓国」

5）江副隆秀（新宿日本語学校）―「文法を意識しない文法教育」

３．プロジェクトワーク（ゲストセッション）

３．１　目的

韓国内研修では、研修生は教室で授業を受ける受身的な立場であったが、日本研修では、研修生が主体となって能動的に活動できるカリキュラムの作成をめざした。その活動の一つに日本文化を理解するための活動としてプロジェクトワークがあげられる。プロジェクトワークはゲストセッションとし、日本の教育、宗教と教育、日本の話芸の３つのセッションにおいて講師を招待し、講義を受けるというものである。このゲストセッションを行うために、研修生自身が関連分野の情報を収集し、解読することが必要である。また、講演を行うゲストと直接交渉を行い、講義を聴き、報告書を作成する、といった一連の流れを体験することによって、研修生が韓国の学校現場でゲストセッションを運営できることを目標としたのである。

ゲストセッションのゲストとして、日本の教育、宗教と幼児教育、話芸の３つの分野に絞り、研修生４人が１グループとなり、グループごとゲストセッションを進めた。ゲストセッションに関する報告は、論集本号の衣川隆生・酒井たか子「現職日本語教師を対象とした日本語再研修におけるゲストセッションについて」に詳しく記述されているので、本稿では省略する。

４．学校派遣実習およびホームステイ

４．１　目的

本研修内容の特徴の一つに留学生センター以外の教育現場における実践的な活動を取り入れたことがあげられる。その活動として、研修生が１週間日本の学校現場を見学し、日本人学生を対象に韓国の文化について紹介するという学校派遣実習を行った。中学校もしくは高校で授業の進め方、学生の勉学様子を見学したり、日本人学生と一緒に給食を摂ったり、日本人教師と交流を行ったりすることで、日本人学生および教師と交流を行うことが目的である。

また、この見学期間中に日本人学生に韓国の文化を紹介する実習時間を設け、日本語で授業を行うことを経験するとともに、韓国の文化を日本人学生に紹介する機会を作るよう各学校に依頼した。日本人学生に韓国の文化について紹介することによって、日本人学生には国際交流への意識が高まり、研修生には韓国の日本語教育現場にも直接役に立つ情報が得られたようである。

さらに、研修生が学校派遣実習を行う時期に派遣校の教職員もしくは生徒の家庭にホームステイをし、日本人の日常生活を体験するという活動も同時に行われた。このホームステイのねらいは、日本の学校の教職員もしくは中学生、高校生のいる家庭の日常生活を体験することによって、研修生自身の家庭や韓国人学生の日常生活との違いを体験してもらうことである。

しかし、学校派遣実習を含む本研修時期が１月であり、３年生は入試の時期であること、１年生と２年生は特別活動が予定されていること、学期末試験が予定されていることなど、見学を受け入れる学校を選定することが最も難しい問題であった。ホームステイの受け入れ先に関

しても研修生の平均年齢が 40 代半ばであることからホームステイが受け入れられる家庭を見つけることが難しく、学校派遣実習とホームステイをセットにした研修には様々な事情が絡み、外部の協力を得るための試行錯誤の活動となった。

４．２　実践報告

つくば市、土浦市、牛久市の中学校、高校に研修生の見学受け入れ可否に関するアンケート調査を行い、協力可能な学校を選定、以下の６校で学校派遣実習を実施した。研修生は２名～３名が１グループになり、１月 30 日から２月３日までの１週間、それぞれの学校で見学および実習を行い、２泊３日間のホームステイを行った。

学校派遣実習を実施するにあたって、各学校の実情に合うように授業見学および実習の計画を立てるよう依頼した。ただ、韓国文化を紹介する実習時間を最低１コマ以上は設定するよう依頼した。

以下、各学校の見学実習について研修生の報告を紹介する。

1）谷田部東中学校

〇授業参観時間数：14 時間

〇授業（実習）時間数：５時間

〇自己評価：役に立ったし、とてもよかった。日本語の勉強に本当に役に立つ体験だった。日本語の勉強にも役に立ったし、生徒たちと先生に会うのが楽しかった。また、韓国の文化の紹介もよかった。本当に良い経験になりました。学校に韓国ブームを起こした記憶は良い思い出になりました。

2）高崎中学校

〇授業参観時間数：16 時間

〇授業（実習）時間数：５時間

〇自己評価：実習時間の予定は３時間でしたが、学校から要望があって５時間やりました。大変有意義な生活でした。本当に良い経験になりました。国は違っても学校の先生という共通点があって役に立つ時間でした。また韓国について少しだけでも日本の先生および生徒たちに紹介する機会になりました。まるで私が外交官のように感じられました。両国の文化の比較もできましたし、実際、学校で生活している生徒を見ることができて幸せでした。ホームステイも良い思い出を作りました。

3）茗溪学園高・中学校

〇授業参観時間数：19 時間

〇授業（実習）時間数：５時間

〇自己評価：本当に良い機会でした。日本語を聞く能力も話す能力も向上したんじゃないかと思います。また、韓国を少しでも日本の生徒たちに紹介できてよかったと思います。は

じめは見学時間が長いのではないかと思って心配になったが、見学が終わる金曜日は日本語が前よりも自然になったような気がして本当によかった。まじめに実習をしたと思う。１日だけの訪問ではなく１週間の間学校を見学することが最初は心配だったが、日本の学校の事情がよくわかるようになって本当によかった。

4）並木高等学校

○授業参観時間数：７時間

○授業（実習）時間数：１時間

○自己評価：自分の実習のための準備不足を感じました。本当にいい経験だったんですが、私がもっと自信を持って積極的に参加できなかったことが残念だった。

5）土浦第三高等学校

○授業参観時間数：12 時間

○授業（実習）時間数：１時間（１年生と２年生 480 人を対象に講堂で実施）

○自己評価：授業の準備も実際の授業もとてもやりがいがあった。５日間の実習は多様な体験（高校の教育、高校生の生活）ができてよかった。日本の高校の教育と高校生、若者の言葉使いについて勉強できた。日本の学校の事情を少しでも理解できるようになった。そして先生方々の授業を見てたくさんのことを学んだ。

6）牛久南中学校

○授業参観時間数：12 時間

○授業（実習）時間数：２時間

○自己評価：日本の教育の現場で色々な面を直接に接することができました。また、日本の生徒たちに授業をしたことも負担ではありましたが、良い体験になりました。校長先生と中学校の実態を詳しい部分まで話し合ってよくわかるようになった。教師と生徒を対象にした実習は韓国文化を紹介する良いチャンスだった。この研修で一番負担に感じていた授業だったが、一番役に立つ時間でした。

以上の研修生の報告からも分かるように、学校派遣実習についてかなり負担を感じていたようである。韓国では韓国語を使って文法説明および日本語の指導を行っていたため、日本語で授業を行った経験がないことや、派遣された学校の教師と学生との関わり方についても不安があったことがうかがえる。しかし、学校派遣実習終了後、研修生は日本人学生および教師に韓国の文化を紹介する機会が与えられたこと、日本人学生と交流が行えたこと、日本の学校現場の体験ができたことに非常に満足している様子だった。

本研修プログラムの最も大きな特色である学校派遣実習の実施にあたっては地域の学校の協力が不可欠であり、実現にはさまざまな問題があった。しかし、韓国の日本語教師と日本の学校の先生および生徒との交流が行えたことや、筑波大学と地域との緊密な協力関係を結べた

ことに大きな意義があり、今後ともぜひ継続して実現したい研修内容である。この場を借りて学校派遣実習を受け入れてくださった各学校にお礼を申し上げたい。

５．留学生センターの授業見学

５．１　目的

研修生は韓国の中学校、高校において初級レベルの日本語を教えている現職日本語教師であるため、本センターで行われている日本語の授業を見学し、初級レベルの学習者に日本語を教える際の教授法、教具の利用方法、カリキュラムの立て方、学生への接し方などについて学ぶことを目的に留学生センターの授業見学を行った。本センターでは国費留学生の日本語研修コース（初級）およびレベル編成による補講授業が行われているが、研修生には初級と中級以上の授業を３クラス以上見学するようにした。初級レベルの授業を見学するときは授業担当教師の補助役および学生のペアワークの相手役をして積極的に授業に参加してもらう一方、中級以上の技能別授業を見学するときは研修生自身も日本語力を向上させるために聴講するようにした。

研修生は韓国では同一母語を背景とする初級レベルの学習者を担当しているが、日本における多国籍、多言語を母語とする初級レベルの学習者の日本語授業を見学することによって日本語教育の多様性、直説法による初級レベルの授業について考える機会になったようである。

５．２　実践報告

本センターで開講している初級および中級以上の授業を各自の授業スケジュールにあわせて、日本語予備教育コース、SJ クラス、漢字、作文、インタビュー、聴解などの授業を見学してもらった。以下、研修生の見学後の報告についていくつか紹介する。

〇授業の進め方について勉強できた。熱心に見学したと思う。

〇初級と中級の学生たちといっしょに勉強しました。英語が下手で大変でしたが、教えたり習ったりしたので良い経験でした。学生たちの立場が理解できました。

〇漢字の授業は韓国でも試してみるつもりです。作文はやっぱり難しかったし、インタビューの時間は役に立ちました。

〇色々な国からきた学生たちの授業がとても面白かった。授業時間にいろいろな教材を使ってみようと決心した。また、やさしくておもしろい漢字の教え方も工夫してみよう。

〇教授法を学ぶ時間になって役に立った。

〇文法の時間はおもしろくてよくわからなかったのをはっきりわかるようになった。また他の外国人の発音を聞いて反省になった。

〇教材の使い方や役割をわかるようになった。

留学生センターの授業見学を通して、多国籍の留学生が混在する日本語教育の現場運営のノーハウが分かった、多様な教具を利用した授業の進め方が役に立ったという報告をあった。また、韓国人日本語学習者が苦手とする漢字教育について強い興味を持っており、漢字の面白い教え方についても学んだようである。研修生からは上級学習者を対象とする補講授業をもっと聴講したいという要望があったが、短期間に色々な内容を盛り込んだ研修では時間が限られ、授業を聴講する時間を十分に作ることができなかった。来年度の研修に向けて改善が必要であろう。

６．オフィスアワー

６．１　目的

オフィスアワーとは、留学生センターの専任教員が研修生の世話人となり、研修生と１対１で質問に答えたり、日本での研修をサポートするというものである。本研修では上述した通り、技能別日本語教育方法論や学校派遣実習、留学生センターの授業見学など様々な内容が盛り込まれており、これらの活動は研修生全員もしくはグループで活動を行った。しかし、研修生の中には日本語学や日本語教育の分野においてさらに深く学びたいという要望や、日本の生活習慣や日本事情について先生に個人的に質問をしたいという要望があった。

そこで、本センターの専任教員が研修生と１対１の質問時間を設け、研修生が普段感じていた日本語に関する疑問や専門的な知識について直接話し合えるようにした。このオフィスアワーを通して、研修生は普段はあまり接することがない大学教員とアカデミックな視点から日本語を分析したり、日本語の学習および教授法について話し合ったりすることで、今度の日本語学習もしくは日本語の指導について考える機会を作るというのが目的であった。

このオフィスアワーを効率的に運営するために、研修生には来日する前に、オフィスアワーで話し合いたい内容について考え、情報収集を行うよう事前準備を進めた。事前に本センターの専任教員の専門分野を伝え、その中から特に興味のある分野もしくは深く勉強したいテーマについて考えてもらい、研修生が決めたテーマに最も近い分野の専任教員を世話人とし、１対１で指導を行うようにした。

６．２　概要

研修期間中、オフィスアワーは週に１コマ計３コマを実施した。オフィスアワーを実施するに当たって、世話人が一方的に研修生に知識を与えるのではなく、研修生が知りたい内容や勉強したい分野について積極的に質問をしたり、調べたりするよう注意した。研修生が学校現場で学生を教えるときに生じる問題や疑問について、自主的に調べ、解決する方法を学び取ってほしいと思ったからである。オフィスアワーの後は、研修生全員がメールやレポートで世話人と話し合った内容について筆者に報告するようにし、研修生が自主的にオフィスアワーを運営

するよう促した。

オフィスアワーで取り上げられたテーマは以下のとおりである。

〇日本の年中行事および敬語の使い方
〇条件の表現
〇日本の実業高校の教育
〇日本の学校教育
〇日本と韓国の教育制度
〇プロソディ、ヤマ、アクセント、待遇表現
〇日本人の衣食住
〇評価方法

オフィスアワーを実施した後、研修生は世話人と１対１で話せる機会が持てたことに大変満足していた。普段は大学の教員と話す機会がほとんどないため、各自の質問や知りたい内容について世話人に直接質問をしたり、調べたりする時間が持てたことが大変良い経験になったようである。また、学校現場に役立つ知識を得たり、今後の教育改善に向けて問題意識を明確にしたりする時間が作れたという報告もあった。

しかし、これらのオフィスアワーで取り上げたテーマを見ると、日本語学に関するものや、日本の学校教育や文化に関するものなど、さまざまである。研修生が日本の学校教育や中等教育機関の教育制度に興味を持つのは当然であるが、大学教員である世話人がこれらに関する十分な知識がない場合もあった。オフィスアワーをもっと有効な時間にするためにはさらに綿密な事前準備が必要であり、来日前に世話人と連絡を取り合うなどの工夫が必要であろう。研修生の研修終了アンケートからもオフィスアワーの事前準備が十分ではなかったことへの反省が見られた。オフィスアワーの運営に関しては今回の経験を踏まえ、さらに改善する必要がある。

７．おわりに

現職の日本語教師を本センターに受け入れ、研修を行うというのは初めての試みであった。前例のないプロジェクトの実施だったが、短期間に技能別日本語教育方法論、学校派遣実習、留学生センター授業見学、ゲストセッション、オフィスアワーなど、さまざまな内容を盛り込んだ研修で、成功裏に終了したと思う。

研修の対象が現職の日本語教師である特色を生かし、地域の学校教育機関の協力を得て教育現場に研修生を派遣したり、ゲストセッションを運営したりした経験は研修生の今後の教育活動に貴重な体験になっただろう。また、多様化する日本語教育の新たな試みとして本研修が持つ意義は大変大きいものと思われる。

本年度の研修は初年度であり、反省点は多く残されているが、本研修は今後も４年間継続して行われる予定なのでより良い研修の実施をめざして改善していきたい。

参考文献

阿部洋子・八田直美（2005）「海外日本語教師上級研修が目指すもの」『国際交流基金　日本語教育紀要』第１号：233-239

生田守・北村武士（2006）「単一国研修における海外センターと国内の連携」『国際交流基金　日本語教育紀要』第２号：97-104

澤邉裕子・金姫謙（2005）「韓国の中東教育段階における日本語母語話者参加の実際とその意義」『国際交流基金　日本語教育紀要』第１号：115-129

横田紀子（2005）「第 2 言語教育における教師教育研究の概観―非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて」『国際交流基金　日本語教育紀要』第１号：1-18